

氏 名：堀 井 湖 浪

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 2 8 号

学位授与年月日：平成 2 0 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：精神科に勤務する看護師の反省的実践を促すピア・グループに  
関する実践研究

A STUDY ON A PEER GROUP TO ENCOURAGE  
PSYCHIATRICK NURSES' REFLECTIVE PRACTICE

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 筒 井 真優美

副査 濱 田 悦 子

副査 守 田 美奈子

副査 鶴 田 恵 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の背景】

現在、日本では精神医療の変革が求められているが、精神科における看護実践能力の向上のための取り組みは必ずしも進んでいるとはいえない。一方、看護における反省的実践は、患者との関わりから看護師が学びつつ実践していく方法として精神科看護領域でもきわめて有用と考えられているが、継続教育の一環として臨床の場で反省的実践に取り組んだ研究はまだ見られない。

### 【研究目的】

精神科看護師によるピア・グループを実施し、そこで語り合うなかでリフレクションがどのように進んでいくか、そのプロセスを明らかにする。また、そうしたピア・グループが教育的機能だけでなく、サポート機能を持つことを明らかにする。

### 【研究方法】

精神科看護師のピア・グループの実施を主なアクションとしたアクション・リサーチ。

研究参加者：関東圏にある民間精神科病院の慢性期女子閉鎖病棟に勤務する看護師 10 名。申請者もファシリテーター兼 1 メンバーとして参加した。

データ収集及び分析方法：毎週 1 回 40 分のピア・グループを 9 ヶ月間実施。クリティカルインシデント分析の方法に準拠し、参加者が語る「気がかり」な出来事から、その場面の再構成を参加者全員で行った。そのやり取りを参加者の了承を得て録音したテープから逐語録を作成しデータとした。また、毎回、研究指導者のスーパーヴィジョンを受けながら内容を分析し、次のグループに臨むという円環的作業を行った。最後に、逐語録から参加者の発言に含まれるリフレクションを抽出し、テーマごとに分類、それらが参加者同士のどのような相互作用において生み出され、

展開されていくかについて、そのつながりを辿った。

### 【倫理的配慮】

参加者を募るに当たり、病院の倫理委員会で研究計画書の審査を受け承認を得た。参加者には、研究の趣旨、自由意思による参加、中止の自由、匿名性の保障、データの研究外目的での不使用、学位論文として提出、学術雑誌等に発表する旨などを説明し、文書により参加の同意を得た。さらに、申請者が当該病棟の主任看護師であったため、グループでの発言や参加が職務上の評価などには一切つながらないことを看護部長・病棟師長にも確認し、参加者にもその旨説明した。

本研究の計画書は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会で承認された。

### 【結果】

グループは計 29 回開催され、病棟看護スタッフのほぼ全員 10 名が参加、1 回の参加者は 2～5 名、平均 3.2 名であった。もっとも頻繁に語られたのは、理不尽な患者の行動への戸惑いや激しい怒りであった。グループでのやり取りをリフレクションという視点で分析すると、《患者理解へと向かうリフレクション》と《自己理解へと向かうリフレクション》とが絡み合いながら展開、やがて《自分と患者の関係やケアについてのリフレクション》へと結びついていった。

初めは怒りや戸惑いとして語られた出来事も、患者の気持ちや患者を取り巻く人間関係について語られるうちにその意外なつながりが分かり、不可解に見えた患者の言動の意味が明らかになると同時に、そのことに気づけていなかった自らの問題にも直面化できるようになった。それは、＜他者の気持ちの推量＞から＜自分の体験と他者の体験との比較・照合＞を通して＜関係性の検討＞へ、さらに＜現象の再解釈＞へと向かうプロセスであった。

参加者は、グループのなかで共感とともに自分の体験が普遍的なものとして受け入れられ、より深いところにある患者に対する自らの感情に気づいていったが、率直な異和感の表明もまた、リフレクションを深めるきっかけとなった。そして、病棟でのそれぞれの役割やプライマリーナースゆえの悩みといった看護チーム全体の問題が明らかにされていった。また、患者に対して新たな見方が可能になった参加者は、患者とのつながりを取り戻そうと関わりに工夫するようになるなど、実践上の変化を見せるようになった。また、ちょっとした患者の変化に気づけるようになり、それがきっかけで深い無力感や徒労感から希望を取り戻した参加者もいた。

### 【考察】

グループでは、日々精神科閉鎖病棟で慢性期の患者と関わる看護師の激しい怒りや無力感、空しさ、罪悪感、看護の意味を見出せないでいる状況が語られたが、そこには患者への深い共感も潜んでおり、看護師は共感疲労の状態にあったと考えられる。

しかし、患者に対するネガティブな感情が責められることなくユーモアをもってグループで受け入れられ、ときにはまったく異なる感情や見方が語られることによって、患者に対する非難と看護の空しさの堂々巡りの話し合いが、患者理解と自己理解へと向かうリフレクションに転換することが可能になるのである。またこのことにより、患者の思いへの感受性を取り戻すと同時に、個人の問題から病棟チームの問題という捉え方が可能になり、患者との関わりに新たな意味を見出すことができれば、新たな実践へと結びつくことも示された。

こうした結果から、ピア・グループで自らの感情を振り返り、新たな思考へとつなげていくことが、看護師へのサポートと同時に看護の実践にとっての重要な鍵となることが明らかになった。

## 論文審査の結果の要旨

博士審査専門委員会では、まず、申請者から本論文が全体として読みやすい日本語で書かれていること、記述が明快で、精神科病棟に勤務する看護師の体験が生き生きと描きだされており、改めて精神科看護の難しさがよく理解できることが評価された。

また、フィールドとなった病棟の主任看護師である申請者が中心となって看護スタッフのピア・グループを実施するという本研究の発想は、申請者自身が1民間精神科病院の慢性期病棟で限られたスタッフとともに日々悩みながら実践しているからこそ生まれたものであり、その切実な問題意識に根ざした発想自体に、この研究のオリジナリティが認められる。

最終的に、このグループにはほぼその病棟の全看護スタッフに当たる数の参加者が得られ、最後まで続けられたのは、こうした現場のリアリティに即した実践研究であったからこそであっただろう。また、豊富なデータにより、参加者がグループのなかで自らリフレクションを進めていくありさまが説得力をもって描き出されている。このこともまた、参加者が苦労を共にする仲間同士であったことが大きいと思われるが、さらにそこに申請者のファシリテーターとしての力量も伺うことができる。

また、本研究では、グループでのやり取りを分析することによって、グループのなかで患者についてのリフレクションが、自分についてのリフレクションと重なり合い、ついに双方の関係性についてのリフレクションとなっていくダイナミックなプロセスが明快に説明されている。また、それが個人のレベルでの「反省」に終わらず、チーム全体のダイナミクスの理解にまで進んでいることは、注目すべき成果であったといえる。

さらに、研究者自身のファシリテーターとしての苦心や悩みにも言及したことで、ピア・グループのリアリティが増し、アクション・リサーチとしての方法の検討も深まった。

最後に、本研究では、ピア・グループで自分たちの体験の感情面に注目しながら話し合うことが、看護師の思考と感情とを結びつけ、患者と自分自身についての共感的理解を助けると同時に、スタッフ同士の相互理解を促し、孤立無援状態から希望を見出すに至ることが示された。このことは、従来臨床の場で行われてきた知識や技術の習得に偏りがちな院内教育や、問題解決的志向性の強いカンファレンスなどとは違った、新たな継続教育の方法を提示した点で、大きな意義が認められる。

以上を勘案した結果、本博士審査専門委員会は本論文を、日本赤十字看護大学学位規程第3条第3項により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認めた。また、本申請者が修士課程から一貫して、精神科領域での患者と看護師とのかかわりに関心を寄せ、実践的な研究を行ってきたこと、さらに現象を的確に分析する力を磨いていることなどから、今後看護研究者として自立した研究活動を行うに足る能力と学識を有することを専門委員会は認め、最終試験に「合格」と判定した。